

B—36 ナバホ族・プエブロ族インディアンの被服について

大阪市立大 中嶋 朝子

1. 被服の形態とその変遷についての研究を推進するため、1963年6～9月にアメリカ合衆国を訪ねた。というのは、アメリカ合衆国という文明国に住みながら、かなり原始的なアメリカ・インディアンの被服の実態を視るためであった。その時にえた資料に基づいて、アメリカ・インディアンのナバホ族、プエブロ族の被服とその変遷についての考察を試みた。

2・3. 現在のプエブロ族はニューメキシコ州のサンタ・フェとアルバカーキー付近に多く住んでいる。彼等は紀元700年頃から木綿織物を簡単な織機で織っていた。彼等の生活や服装は彼等の信仰と宗教的行事から切離しては理解できない。また宗教的行事として種々のダンスを踊るが、ダンスのときの服装は特別の意味をもつ

ている。

ナバホ族は、現在アリゾナの北東・ユタの南東・ニューメキシコの西北にまたがる Navaho Reservation に住んでいるが、1000～1500年に北方から南西へと、狩猟と自生の食物を採集して生活しながら集団で移動してきた半ば流浪の民族である。プエブロの土地にきたとき、彼等と交流を持ち、プエブロの織機を模倣して、彼等の飼育している羊の毛を原料としてナバホ織をつくるようになった。そして獣皮の衣服から織物の衣服へと変った。現在の服装は、彼等が1860年 Fort sumner まで移動してきて、U. S. 政府によって包囲され、5年間捕われの身となったとき以来のものである。